

Spoon

© Bananastar 2009

登場人物

- 矢野ヨシオ(42) 男性。プリン製造工場勤務。  
アナベル(33) 女性。フィリピン人。パブ勤務。  
矢野タクロウ(39) 男性。ヨシオの弟。作家業。  
矢野ユウコ(29) 女性。タクロウの妻。  
矢野ハツジロウ(71) 男性。ヨシオの父。  
矢野ハルコ(65) 女性。ヨシオの母。
- 工場長(55) 男性。プリン製造工場責任者。  
ママ(50) 女性。フィリピン人。パブ経営者。  
主任(25) 男性。プリン製造工場勤務。  
社長(59) 男性。プリン製造会社経営。  
渡辺(42) 男性。金物屋店主。
- パンクロッカー風の男(19)  
大家のおばちゃん(70)  
ウエイトレス(17)  
ウエイター(17)  
受付の男(30)  
検品作業員  
工事作業員  
二人乗りライダーの男  
二人乗りライダーの女  
赤いランドセルの少女

矢野ヨシオ(11) 男性。小学六年生。  
井川ミキ(12) 女性。小学六年生。  
矢野タクロウ(8) 男性。小学三年生。  
矢野ハツジロウ(37) 男性。蕎麦屋店主。  
矢野ハルコ(31) 女性。蕎麦屋の女将。  
永原(11) 男性。ヨシオのクラスメイト。  
渡辺(11) 男性。ヨシオのクラスメイト。  
根本(11) 男性。ヨシオのクラスメイト。  
大山(11) 女性。ヨシオのクラスメイト。  
向井(13) 男性。中学一年生。  
不良(12) 男性。中学一年生。  
番長(15) 男性。中学三年生。  
番長の女(14) 中学三年生。  
男前(15) 男性。中学三年生。  
小学校担任(33) 男性。  
中学校担任(42) 男性。  
常連客(37) 男性。  
司会者の男(57) テレビ司会者。  
アシスタントの女(22) テレビタレント。  
外国人超能力者  
通訳  
女性霊能者  
現チャンピオンの少年  
『12』番の少年



○テレビ映像（回想）

楽しいなTVショーのステージセット。ステージ背景に、『少年エスパーをさがせ！』という番組名を示す看板。

ステージ中央。『12』と書かれたプレートに胸に付けた少年が真剣な表情で、持ったスプーンを見つめている。

上手。笑顔で少年を見つめながら、司会の男とアシスタントの女が立っている。

下手。審査員席。少年を見つめている外国人超能力者と通訳、女性霊能者、現チャンピオンの超能力少年が座っている。

客席では、大勢の観客が少年を見つめる。

静寂。

少年がスプーンを見つめ続けているが、スプーンは曲がらない。

時間切れをお知らせする効果音が鳴り、溜息のもれる観客席。

司会「はい。残念ですが、ここで、時間切れとなってしまいました」

アシスタント「残念ですねー、あと少し時間があれば…」

司会「そうですね、次の少年に期待しましょう」

少年が舞台袖に歩いていく悲しい背中。会場から些細な拍手。

アシスタント「つづいては、エントリーナンバー十三番。矢野ヨシオくんの挑戦です」

軽快な音楽でステージ中央の幕が開き、矢野ヨシオがステージに登場する。

挑戦スタートを知らせる効果音。

静まり返る場内。

ヨシオが、持ったスプーンを見つめる。

司会「（抑えた調子で）さて、矢野ヨシオくんの挑戦が始まりました。今日は、寝台特急に乗って、はるばるやって来てくれました。ご両親と弟のタクロウくんも観客席で見守っています。

この緊張感の中で、果たしてスプーン曲げを決められるのでしょうか」

アシスタント「緊張しますからね、普段のようにリラックスして挑戦してほしいですね」

耳打ちで話している厳しい表情の審査員たち。

微笑んでいる司会の男とアシスタントの女。

ヨシオが持ったスプーンを見つめる。スプーンが曲がる。

司会「おーっと！ 曲がりました！ スプーンが見事に曲がっています！」

客席から歓声。審査員も領きながら拍手を送る。

アシスタント「素晴らしい！ 矢野ヨシオくん！ 見事にスプーンを曲げています！」

歓声が鳴り止まない会場。

ヨシオが笑う。

タイトル『Spoon』

○プリン工場・ベルトコンベア

ベルトコンベアの音。矢野ヨシオの目が繰り返し右から左に動いている。ベルトコンベアの上を流れている大量のプリンの検品作業をしているヨシオ。ヨシオの目の動きが止まる。大量のプリンからひとつプリンを取り、容器の底を見上げる。ヨシオ、訝しげな表情で無言のまま別のプリンを取る。容器の底を見上げる。ベルトコンベア進行方向の反対を見るヨシオ。

○同・工場長の部屋

デスクで書類にスタンプを押している工場長。

押し終わっていない書類の山。押し終わった書類の山に書類を重ねる。

ドアをノックする音。

工場長「はい？」

ドアの方を見る工場長。ドアをノックする音。

工場長「はい！ 開いているよ」

ドアを開けて、入ってくるヨシオ。プリンをひとつ握っている。

ヨシオ「失礼します」

工場長「なんだ？」

ヨシオ「……あの」

工場長「なんなんだ、早く用件を言え」

ヨシオ「あの、このカラメルなんです（容器を見せる）」

工場長「カラメル？ なんだ？」

容器を見る工場長。

工場長「なんなんだこれは、矢野」

工場長、容器のパッケージを剥がし、プリンの状態を確認する。

ヨシオ「あの」

工場長「これじゃあカラメルソース部分が、まるつきり逆さまだろ？ 矢野」

ヨシオ「はい」

工場長「はいじゃないよ。はいじゃないんだよ。ほら、これじゃさあ、プリンのデザインとして、まったく売り物にならないんだよなあ。え？ 違うか、矢野」

ヨシオ「はい」

工場長「皿に盛ったときの、あの全体のバランスとしてのプリンらしさが大事なわけだからさあ。

これじゃもう、まるつきり出鱈目になるだろ？ え？ そうだろ？」

ヨシオ「ああ……そうです」

工場長「オマエさあ…普通、こんなことにならないと思うけどなあ、普通、こう、お皿に乗っけるとさあ、上の部分にカラメルがくるものなんだよ、普通はそうだよ。それで、プリンなんだ

から」

飲みかけのコーヒーカップの置かれた小皿を取り、小皿にプリンをのせる工場長。

工場長「ほら見てみな？　こんなじゃ売り物にならないよ」

小皿の上にプリンがのっている。カラメルソースがプリンの底に付いている。

内線電話をかける工場長。

工場長「あ、中里くん？　矢野が不良品出しちゃったんだよ。悪いんだけどさあ、ラインの方、確認してもらえるかなあ。至急頼むよ」

ヨシオ、プリンを見つめている。

#### ○同・駐車場

ゴミ収集車が走り始める。

#### ○フィリピンパブ・テーブル席

こじんまりとしたパブ。

テーブル席に座っているヨシオ。他に客はいない。

ママがヨシオに、ピラフを持ってくる。

ママ「はい、ヨシオさん、お待ちどうさま」

ヨシオのテーブルにピラフが置かれる。

ママ「いつも、いつも、こんなものしか出せないけれど、ごめんなさいね」

ヨシオ「いえ、ピラフ嫌いじゃないので」

鞆からお箸を取り出すヨシオ。

ママ「なーんだ、ヨシオさんはピラフ好きだったのね」

ヨシオ「いえ、そうでもないんです」

ママ「（鼻で溜息をつく）」

ヨシオ、お箸でピラフを食べる。

ママ「あつ、そうそう、お店に新しい女の子が入ったのよ、ヨシオさん。運がよければ、あなた今夜、新しい子と遊べるんだよ…アナベルと」

ヨシオ「アナベル？　……でも僕、運わるいので」

ママ「あなたは、運いいよ。あなた、運いいはずだよ、素晴らしいよ…お酒のみなよ」

ヨシオ「僕、お酒あまり飲めないのよ」

ママ「いつも、ピラフか、カラオケか、ウーロンばかりじゃないですか、ヨシオさん、どうしてなのよ」

ヨシオ「…僕、お酒あまり飲めないのよ」

ママ「かなしいねえ」

ピラフを食べるヨシオ。

入り口のドアが開いて、アナベルが入ってくる。

アナベル「おはようございます！」

入り口の方を見るヨシオとママ。

ママ「おはようございます！あなた、もうお客さん来てますよ、早くしてくれないと(ヨシオを見て)アナベルですね」

ヨシオ、アナベルを見つめる。

○同・外(夜)

ドアの前に『フィリピンパブ・マグノリア』という看板が置いてある。

ドアに掛かっている『OPEN』のプレート。

ママ、ドアから出てきて、辺りを簡単に見渡してからプレートをひっくり返す。

店内に入るママ。ドアに掛かっている『CLOSED』のプレート。

○同・テーブル席

ヨシオのいるテーブルにアナベルが座っている。

アナベル「はじめまして、あたし、新しく入った新人のアナベル三十三歳です。よろしく」

ヨシオ「うん…これ、ごちそうさまでした」

食べ終わった食器を指すヨシオ。

アナベル「ああ…(ママの方を見て)ママ、この人、食べ終わったよ」

カウンター席で煙草をすっているママ。

ママ「もってきてちょうだいよ、あなた」

アナベル「ああ…(ヨシオの方を見る)」

ヨシオが、お箸を片付ける。

アナベル「なんですか、それは？ オハシですか？」

ヨシオ「…まあね」

アナベル「このピラフ美味しくないでしょう。好きなんだね、ピラフが」

ヨシオ「いや、そういうわけじゃないんだ」

アナベル「なんで？ キライなの？」

ヨシオ「いや、キライではない」

アナベル「何が好きなの？」

ヨシオ「カレーライス」

アナベル「なんで？」

ヨシオ「理由とかはない」

アナベル「へえ…お酒のみなよ」

ヨシオ「…うん」

○同・お立ち台



モニターに映し出される『君は薔薇より美しい』のカラオケビデオ。イントロが流れる。グラスを片手にマイクを持ち、お立ち台に立つ、酔っ払っているヨシオ。照明が落ち、ミラーボールが回転している。ぱらぱらと手拍子をたたくアナベルとママ。

歌うヨシオ。純粹で真っ直ぐな歌声。

歌がサビに入り、『変わった』という歌詞をうたう直前にパブ内が停電。暗闇。

アナベル「あれ？ ママ、暗くなったよ」

ママ「歌いすぎたね。電力もたなかったね」

#### ○ヨシオの部屋・居間（朝）

生活感のない、殺風景な部屋。窓から日が差している。

布団で眠っているヨシオ。目が覚める。

上半身を起こし、ぼーっとしている。

目覚まし時計が鳴る。

#### ○アパート・外（朝）

アパートのドアから出て、工場に向かうヨシオ。

ヨシオが鍵を閉めていると、隣の部屋のドアが開く。

パンクロッカー風の男が出てくる。

素早く鍵を閉め、ヨシオの背後を素通りするパンクロッカー風の男。

鍵を閉め終えて、アパートの入り口へ歩いていくヨシオ。

アパートの前を大家のおばちゃんが掃除をしている。その背後を素通りするパンクロッ

カー風の男。背後を素通りするヨシオに気づく大家。

大家「あら、ちよつとアンタさあ、しっかりとマナーを守りなさいよ」

ヨシオ「はい？」

大家「いやいや、あたしのところにねえ、アンタの部屋から大音量の…ロックっていうのかしら？

そういう騒音が凄まって苦情が殺到しているのよ」

ヨシオ「……」

大家「いいかげんにしてもらわないと、こつちも困るのよねえ。スターを夢見るのは構わないけれど」

ヨシオ「…はあ」

#### ○プリン工場・事務室

タイムカードを押すヨシオ。

#### ○同・温度管理室

デジタル数字の温度表示版とボタンが一つ付いている機械の前に立っているヨシオと主任。表示板には『0』と表示されている。

主任「矢野さん、この仕事は初めてでしたよね」

ヨシオ「はい」

主任「まあ、簡単な作業なんですけど……えーっと、見てもらうと判ると思うんですけど、ここに温度表示版がありますよね。作業が始まると、ここの数値が上がっていくんで、調度100になったところで、こっちのボタンを一回押して下さい、（ボタンを押して）こういう具合に」

主任「それじゃあ、宜しくお願いします」

○同・ミキサー室

大量の牛乳がミキサーの中に、流れ出す。

ミキサーが動き始める。

○同・ベルトコンベア

ベルトコンベアが動き始める。

○同・温度管理室

温度表示板の数値が急速に上がっていく。

それを見つめるヨシオ。指をボタンの上に置き、押す準備をする。

温度表示板の数値が上がっていく。『100』に近づき、次第に上昇が遅くなる。

それを見つめるヨシオ。

○同・ベルトコンベア

ベルトコンベアの先頭ラインに検品作業員が立っている。

ゴム製のカーテンを割って、容器に入ったプリンが流れてくる。

○同・温度管理室

『98』になり、『99』になる。

それを見つめるヨシオ。

『100』になる。

素早くボタンを押すヨシオ。

○同・ベルトコンベア

ベルトコンベアの先頭ラインに検品作業員が立っている。

ゴム製のカーテンを割って、容器ごと溶けているプリンが流れてくる。

作業員、驚いた様子でそれを見る。

○同・工場長の部屋

デスクに座る工場長。デスクの前に立つ ヨシオ。

工場長「矢野…普通、こんなことにならないと思うけどなあ、普通は80のはずだろ？ 普通は80になった段階でボタンを押すよなあ。それを90ならまだしも、100になるまで押さないと、どうなる？ え？ それを、オマエは具現化してくれたわけだ」

デスクの上、溶けた容器が置かれている。

工場長「容器ごと溶かすという形で」

ヨシオ「はあ」

工場長「こんなんじゃ売り物に…なるわけがないんだよ」

溶けた容器を見つめるヨシオ。

○同・駐車場

ゴミ収集車が走り始める。

○フィリピンパブ・外（夜）

ドアに掛かっている『CLOSED』のプレート。

ママの声「ヨシオさん…今夜は大事な話があるのよ」

ヨシオの声「はあ…」

ママの声「すごく大事な話」

○同・テーブル席

ママとアナベルが、ヨシオと対面で座っている。

ママ「アナベルが、あなたの子供を妊娠したわ」

無表情のヨシオ。

ママ「（アナベルの方を見て）そうね？ アナベル」

アナベル「そうだよ、ヨシオの子だよ。間違いないよ」

ママ「そういうことなのよ、ヨシオさん」

ヨシオ「…はあ」

アナベル「間違いないんだよ、あなたの子だよ。あの夜に。ヨシオあなたは、とっても酔っ払っていたから…それだから、覚えてないだけだよ」

ママ「たしかに、あの夜、あなたはとつても、とつても酔っ払っていたのよ。それは、あなた自身が一番よく分かっているでしょうね…目をつぶって、それで、思い出してみなさいよ」

ヨシオ、ゆっくりと目をつぶる。

意味深な表情でヨシオを見つめる、アナベルとママ。

ヨシオ、ゆっくりと目を開ける。

ヨシオ「すみません…思い出せない」

ママ「それが証拠ですよー」

アナベル「証拠ですね。あたしは、はっきりと覚えているよ、ヨシオ！」

ママ「ヨシオさん、この子と、アナベルと結婚してあげて」

ヨシオ「はあ…」

ママ「これ以上、不幸なジャピーノを増やさないでほしいのよ。悲しいじゃない」

ヨシオ「ジャピーノ…」

ママ「ジャピーノっていうのは…そう、簡単に言うと、いま、この子のお腹の中にいる赤ちゃんのことよ。あなたが、この子と結婚をしないと、そうやって呼ばれて、差別を受けるに決まっているのよ。これは私からの…いえ、多くのフィリピーナ方の願いでもあるの。この子と結婚してちょうだいよ、ヨシオさん」

ヨシオ「はあ」

アナベル「あたしは、はっきりと覚えているよ。あなたは、あたしを犯しましたよ」

ヨシオ「でも、覚えていないんだ、本当に」

ママ「それが証拠なのよ……なよりのね」

#### ○同・カウンター席

カウンターに婚姻届が置いてある。

『矢野ヨシオ』『アナベル』の文字が記入されている。

真新しいペンと朱肉が、用紙の上ののっている。

カウンターの中、笑顔で立っているママ。

ママ「はい。じゃあ、二人とも親指を出してちょうだいね」

カウンターの外、椅子に腰を掛けている笑顔のアナベルと無表情のヨシオ。

親指を朱肉に乗せるヨシオとアナベル。婚姻届に拇印を押す二人。

ママ「そうそう…結婚のお祝いに、プレゼントしなくっちゃねえ」

ヨシオ「プレゼント」

#### ○同・お立ち台

モニターに映し出される『愛の賛歌』のカラオケビデオ。イントロが流れる。

ショー用の衣装姿のママがお立ち台で仁王立ちしている。慣れた手つきで握られたマイク。照明が落ち、ミラーボールは無い。モニターの明かりが、ママの顔を浮かび上げさせている。

暗闇の中、微かに見えるヨシオとアナベルのシルエット。

歌い出す、ママ。

○プリン工場・事務室

タイムカードを押すヨシオ。

○同・廊下

長い廊下。掃除用具を手にしたヨシオと主任が立っている。

主任「矢野さん、この仕事は初めてでしたよね」

ヨシオ「はい」

主任「簡単な作業です。こちらの廊下を清掃して、それからワックス掛けをして下さい。仕事はそれだけです。ただ…今夜、本社から社長が視察に来るみたいなんです。なので、念入りにお願  
いしますね」

ヨシオ「わかりました」

主任「それじゃあ、宜しくお願いします」

ヨシオ、床洗浄機で廊下を洗浄する。

ヨシオの背後を通りかかった工場長が足を止める。

工場長「しつかりやつてるか、矢野？（床の汚れを指して）なんだよ、こんなじゃ、全然、駄目だろ」

ヨシオ「はい」

工場長「はい、じゃないよ。社長が来るんだよ？ もっとピカピカしておかないとダメだよ」

ヨシオ「はい」

工場長「まったく」

工場長、少し歩いて、足を止める。

工場長「矢野、くれぐれも用具を出しっぱなしにして帰るようなマネはしてくれなよ。頼むよ」  
ヨシオ「はい」

ワックス掛けをしているヨシオ。廊下の突き当りまで掛け終わる。

ヨシオ、一通り廊下を見回して、簡単に何度か頷く。

目の前のエレベーターのスイッチを押すヨシオ。掃除用具を脇に持っている。  
床はピカピカになっている。

○同・事務室

タイムカードを押すヨシオ。

○同・駐車場（夜）

無人の高級車が停まっている。

○同・エレベーター内

社長と工場長、エレベーターで一階に下りている。

社長「実を言うと、この工場について心配していたんだよ。例の損失の件でね」  
工場長「はあ…」

社長「でも、心配は無さそうだ…みんな、よくやってるみたいだし、工場内も…」  
一階に到着するエレベーター。

○同・廊下

社長と工場長の乗るエレベーターの扉が開く。

社長「（廊下を覗き込み）塵ひとつなく清潔」

工場長「いえいえ」

社長「これからも、よろしく頼むよ（笑う）」

廊下に足を踏み入れた瞬間に、滑り転ぶ社長。ピカピカの床。  
呆然と、それを見つめる工場長。

○同・駐車場（夜）

サイレンの音と共に、救急車が走り出す。  
無人の高級車が停まっている。

○ヨシオの部屋・居間（夜）

アナベルが化粧台でメイクをしている。お腹が大きくなっている。  
隣の部屋で、パンクロッカーが練習している楽器の音が聴こえる。

アナベルの目の前にある電話が鳴る。しばらく、鳴っている。

アナベル「（浴室の方を向いて）ヨシオ、鳴ってるよ、電話」

○同・浴室（夜）

シャンプーをしているヨシオが、居間からのアナベルの声に気づく。

アナベルの声「ヨシオ、電話だよ。鳴ってるよ。早く出ないと（小さく聞こえる）」  
シャワーで、頭を洗い流すヨシオ。

○同・居間（夜）

化粧台でメイクをするアナベル。電話が鳴っている。

ヨシオ、パンツ一枚で浴室の方から歩いてくる。身体が濡れている。

アナベル「鳴ってるよ。電話だよ、ヨシオ」

電話をとるヨシオ。

ヨシオ「はい」

ハルコの声「もしもし、ヨシオなの？」

ヨシオ「え？ …ああ、母さんか」

ハルコの声「あなた、元気でやってるの？」

ヨシオ「うん、元気だよ」

ハルコの声「仕事には、ちゃんと行っているの？」

ヨシオ「うん、行ってる」

ハルコの声「ゴハンは、ちゃんと食べているの？」

ヨシオ「うん、大丈夫」

ハルコの声「風邪なんか引いてない？」

ヨシオ「いたって健康」

ハルコの声「あなた、子供のとき、よく風呂上りにビシヨビシヨのまま着替えることあったから」

ヨシオ「昔の話じゃないか…それで、どうかしたの、電話」

ハルコの声「うん…前にも話したかもしれないんだけど、父さんのことなの…その、痴呆がね…

やっぱり、あんまり、よくないんで…まあ、タクロウの方にも、さっき電話してね…でね、一

度、家族団欒じゃないけれども、あなたたちにも、こっちに帰ってきててもらいたくなって思っ

てたの…出来れば直ぐにでも」

ヨシオ「うん…行きたいんだけど、直ぐに休みは取れないんだ」

ハルコの声「そういうものね…タクロウは、直ぐに来てくれるって」

ヨシオ「仕方がないんだ」

ハルコの声「うん、分かったわ。もし、休みが取れたら、すぐに来てね…お父さんも、あなたに

会いたがっているみたいだから」

ヨシオ「うん、わかってる」

ハルコの声「これで、みんなで会えるのも最期になるかもしれないし…」

ヨシオ「…うん」

ハルコの声「それじゃあね」

ヨシオ「休みが取れ次第、直ぐに行くよ」

ハルコの電話が切れ、不通音が鳴る。

電話を切るヨシオ。

メイクをし終わったアナベル、立ち上がりヨシオを見る。

アナベル「あかし、もう仕事行ってくるよ」

ヨシオ「うん」

アナベル「ねえ、ヨシオ…泡ついでてるよ」

仕事に向かうアナベル。

ヨシオの頭に、流しきれていなかったシャンプーの泡が付いている。

ヨシオ「……」

○プリン工場・事務室

タイムカードを押そうとしたヨシオ、タイムカードがない。

ヨシオ、カードをラックから抜き取り一枚、一枚見ていくが見つからない。

工場長の声「矢野」

ヨシオが振り向くと、工場長が立っている。

工場長「きみは、クビになったよ」

工場の音が、遠くで小さく聞こえている。

○市街地の外れ・道（朝）

市街地から少し離れた、田舎の風景が見える車道。

ヨシオとアナベルが乗ったレンタカーが走っている。

○車内（朝）

市街地の外れにある道を走る車。運転席にアナベル、助手席にヨシオが座っている。

アナベル「ヨシオ…休み取れたの？」

ヨシオ「クビだよ」

アナベル「へえ〜」

ヨシオ「キミは？」

アナベル「仕事休んだよ…そういう家族のことには参加しておいた方がいいって、ママが」

ヨシオ「うん…悪いね」

アナベル「（鼻で溜息をつく）」

ヨシオ「運転できたんだね」

アナベル「当たり前だよ。あたしは、運転得意なんだよ。フィリピンでレース出たことだってあるからね」

ヨシオ「へえ〜…でも結構、遠いよ」

アナベル「フィリピンじゃ何百時間も走ってたから大丈夫だよ。（ヨシオの方をちらっと見ながら）構わないですよ。あたしは、運転してても全然、疲れないんだからさあ」

ヨシオ「赤だよ」

○市街地の外れ・道（朝）

赤信号。

横断歩道の手前、急ブレーキをかける車。

停止線を少し越え、車が止まる。

○車内（朝）



目を合わせているヨシオとアナベル。  
アナベル「なんだよ」

前方を見据えるヨシオとアナベル。  
横断歩道を集団登校中の小学生が渡っている。  
その中に女の子がいる。  
赤いランドセル。  
それを見つめるヨシオ。

#### ○小学校・教室（回想）

登校の時間。騒がしい教室。  
自分の席にランドセルを置き、教科書を出しているヨシオ。  
ミキ、みんなに挨拶をしながら教室に入ってくる。  
ヨシオの隣の席につく、ミキ。  
赤いランドセルを机に置く。  
それを見つめるヨシオ。  
ミキ「（微笑みながら）おはよう、矢野くん」  
ヨシオ「（照れながら）おはよう」  
そのヨシオを覗き込む後ろの席の男子。  
男子「（周りの生徒に聞かすように）おーっ、ヨシオ、顔が真っ赤だぞ」  
ヨシオ「（満更でもない様子）なんだよ」  
それに便乗して周りの生徒たちも騒ぎ出す。チャイムが鳴る。  
教室のドアを開けて担任が入ってくる。  
担任「はーい、みんな、席に着け」  
一斉に席に着く、生徒たち。

#### ○同・校庭（回想）

体育の時間。  
二名の男子が50mを走り、ゴールラインを抜ける。  
ゴール横に立って、タイムを計る担任。  
担任「はい、えっと…二人とも、十一秒だな」  
男子1「えー、俺の方が速かったよー」  
男子2「俺、本気出してねーから」  
担任「ごちゃごちゃ言ってるじゃないよ（スタートに向き）はい、次、矢野と永原な」  
スタート地点に着く、ヨシオと永原。  
担任、ホイッスルを吹く。  
ヨシオと永原が走る。

永原が速く、差がどんどん開いていく。

永原、ゴールラインを抜ける。しばらくして、ヨシオもゴールする。

担任「おお、永原、速いねえ…七秒！ 矢野は十二秒、残念！」

○同・下駄箱（回想）

授業が終り、教室に帰る生徒たち。

ヨシオが上履きに履き替えている。

その脇を、永原とミキが歩く。

ミキ「永原くんって足速いね。スゴイよー」

そのやり取りを見つめているヨシオ。

○同・教室（回想）

国語の授業。教卓に立つ担任。黒板に、『私の夢』と大きく書かれている。

担任「はい、それじゃあ、宿題にした作文を発表してもらおうぞー」

生徒たちから、「えー」という声が挙がる。

担任「なんだよ、前もって言っておいただろう？ じゃ、一番に読みたいやつ、挙手」

渡辺「（手を挙げて）はい！」

他の生徒は自信なさそうにしている。渡辺だけ手を挙げている。

担任「（窓際の椅子に座って）なんだ、渡辺だけか？ 最初に読んでおいたほうが得だぞ？ じ

ゃあ、渡辺。前に出て読んでみる」

渡辺「はい！（立ち上がる）」

教卓まで歩いていく渡辺。途中、わざと転んで床に倒れる。生徒たちが笑う。

担任「（呆れた笑い）バカやってんじゃないよ、オマエ」

渡辺、立ち上がって教卓に立つ。

渡辺「礼！」

お辞儀をして、教卓に頭をぶつける渡辺。

生徒たちが笑う。

担任「まったく。ところで、渡辺…作文はちゃんと書いてきたんだろうなあ」

渡辺「忘れしました！」

生徒たちが笑う。呆れる担任。

担任「渡辺。廊下に立ってなさい」

渡辺「えーっ」

生徒たちが笑う。

○同・廊下（回想）

授業終わりのチャイムが鳴る。教室のドアが開き、生徒たちが出入りする。

バケツを持った渡辺。立ちながら、うたた寝をしている。渡辺の頭をボンと叩くミキ。意識を取り戻す渡辺。

ミキ「渡辺くんって、とっても面白いのね。将来の夢は、漫才師？」  
そのやり取りを見つめているヨシオ。

#### ○同・教室（回想）

登校の時間。騒がしい教室。

自分の席にランドセルを置き、教科書を出しているヨシオ。

根本、松葉杖をつき、教室に入ってくる。

男子「あれ？ 根本、どうしたんだよ？」

生徒たちの注目的になる根本。

根本「（自分の席に向かいながら）骨折」

根本の席までの道のりをフォローしていくミキ。他の生徒も周りを囲む。

ミキ「大丈夫なの？ 根本くん」

根本「すっごく痛い」

ミキ「痛そう（根本の席の椅子を引いて）」

そのやり取りを見つめているヨシオ。

#### ○車内（朝）

赤いランドセルを見つめるヨシオ。

小学生たちが、横断歩道を渡り切る。

ヨシオ「…」

アナベル「ヨシオ。あたし、お腹へったよ。ろくに朝食も食べてないもの」

#### ○市街地の外れ・道（朝）

青信号。

二人の乗った車が走り出す。

#### ○ファミリールレストラン・公衆電話前

公衆電話で実家に連絡しているヨシオ。

ヨシオ「うん、そうだよ…そう、休みが取れたんだ…うん…いや、もう今、向かっているとろだよ…たぶん、夜くらいにはそっちに着けると思うよ…うん…わかった…うん…そうだ、母さんには報告してなかったんだけど…いや、そうじゃないよ…それは十年も前の話だよ…そうじゃなくて、結婚をしたんだ…うん…フィリピン人だよ…うん、そう…色々忙しくて、連絡できなかつたんだから…その、アナベルって言うんだけど…え？ 違うよ、アナベルだよ…うん…アナベルも一緒に着いてきてくれたんだ…うん、今一緒にいるよ…兎に角、そういうわけだか

ら、詳しいことは行ってから話すから…うん、わかってるよ」

#### ○同・テーブル席

アナベルが座っているテーブル席に歩いてくるヨシオ。席につく。

メニューをラックから取り、パラパラとめくるヨシオ。

アナベル「あなたの分、もう、とつくに頼んだよ」

ヨシオ「…」

ヨシオ、メニューをラックに戻す。

ヨシオ「母さんには、報告しておいたから。キミのこと」

アナベル「ああ」

ヨシオ「だから、突然、行けなくなったとかは、その…出来れば、やめてほしいんだ」

アナベル「あたしは、そんな約束出来ないよ。だって、トラック事故にあつて、轢き殺されることだってあるんだからさあ。それで、あれだよ…それで、約束を破ったことにされるんだから、

あたしは、そういう約束は出来ないんだよ」

ヨシオ「…」

アナベル「旅に事故死はつき物だよ」

ヨシオ「…」

ウエイトレス、注文の料理を持って歩いてくる。

ウエイトレス「BLTサンドのお客様」

アナベル「あたしだよ（料理を受け取る）」

ウエイトレス「カレーライスのお客様」

アナベル「（食べながら）あなただよ」

ウエイトレス、カレーライスをヨシオの前に置く。

それを見つめるヨシオ。

#### ○小学校・教室（回想）

給食の時間。生徒たちの机は、グループごとと島になっている。

配膳の列に並ぶヨシオ。プレートの上にカレーライスの食器が置かれる。

後続くミキが大山とお喋りしている声が気になるヨシオ。

大山「ねえねえ、ミキ、昨日のテレビ見た？ スプーン曲げの番組」

ミキ「うん、見た見た！ 少年エスパー。すごかったよねー。なんであんなことが出来るんだろ  
う？」

大山「本当だよね。あたしなんて、昨日、家で挑戦してみたんだけど、全然だったよ」

ミキ「ああいう超能力が出来る人って、なんだかカッコイイよね」

席に戻って来るヨシオ。机の上に給食を置き、席に着く。

ヨシオの前に、ミキが座る。

ミキ「矢野君は、スプーン曲げ出来る？」

ヨシオ「スプーン曲げ？」

ミキ「うん。超能力って言うんだって」

ヨシオ「やったことないけど」

プレート上のスプーンを手に取るヨシオ。

それを見つめるミキ。同じグループの生徒たちも見ている。

無言のまま、スプーンを見つめるヨシオ。

しばらくして、スプーンが曲がる。

驚きの歓声をあげる生徒たち。

ミキ「え!? 嘘! スゴイよ! 矢野くん!」

その声を聞きつけ、グループの違う生徒たちも駆け付ける。

ミキ「それって、超能力だよ! スゴイ!」

男子「矢野、もう一回見せてくれよ」

男子からスプーンを渡されるヨシオ。

スプーンを見つめるヨシオ。スプーンが曲がる。歓声上がる教室。

ミキ「やっぱり、まぐれじゃなかつたんだね。本当にスゴイんだ!」

嬉しそうに照れるヨシオ。

ヨシオに対抗して、永原、渡辺、根本も挑戦するが、スプーンは曲がらない。

男子「もう一回見せてよ、矢野」

女子「矢野くん、あたしのスプーンも曲げてみて」

ミキ「テレビ出なよ」

騒ぎに見かねて、教卓で座っていた担任が立ち上がる。

担任「おいおい、一体、それを誰のスプーンだと思ってるんだ?」

歓声にかき消される、担任の注意の声。

担任「やれやれ」

曲がったスプーンを握るヨシオ。大勢の生徒に囲まれ、微笑んでいる。

○ファミリールレストラン・テーブル席

カレーライスを見つめるヨシオ。

アナベル「(食べながら)だって、あなた、カレーライス好きなんですよ」

ヨシオ「…ありがとう」

鞆からお箸を取り出すヨシオ。お箸でカレーライスを食べ始める。

○同・駐車場

車内に乗り込んでいるヨシオとアナベル。

アナベル、運転席側の窓の外を見つめている。

アナベル「出ましたね」

ヨシオ「出た？」

アナベル「出ましたよ」

ヨシオ「何が？」

サイドミラーに写る、アナベルの顔。

アナベル「こんなんじゃ、行けないよ。あなたの家に行ったときに、こんなんじゃ、変な病気を  
持っていると思われるよ。それじゃあ、あなたが可哀想だよ」

ヨシオ「どうしたの？」

ゆっくりとヨシオに振り向くアナベル。

アナベルの顔に、無数の発疹が出ている。

それを見つめるヨシオ。

### ○実家・蕎麦屋店内（回想）

下校の時間。寂れた店内。客はいない。

カウンター席で新聞を読むハツジロウ。テーブル拭きを中断しているハルコ。入り口付  
近に、ヨシオのクラスメイトたちが立っている。先頭にミキがいる。

ハルコ「せっかくお見舞いに来てくれたのに、なんだか、ごめんねえ」

ミキ「矢野くんの病気、そんなに悪いんですか？」

ハルコ「（首を振って）ううん、違うの…尋麻疹が出ちゃったんで、ちょっと、みんなに顔を見  
せるのが恥ずかしいみたいなの。ごめんね」

男子「なんだ。せっかくスプーン曲げ見せてもらおうと思ったのに」

持参したスプーンを持っている男子。

ハツジロウ、スプーンを持った男子を横目でちらつと見る。

ハルコ「（呟くように）スプーン曲げ？」

ミキ「じゃあ、わたしたち、帰りますね。矢野くんは、クラスのみんな、待っていますと、伝え  
といてほしいんですけど」

ハルコ「うん（考えて）…ちょっと、待ってね」

店内にある住居出入口を覗くハルコ。

ハルコ「（強い調子で）ヨシオ、本当にいいの？ みんな来てくれているのよ。スプーン曲げ、  
見せてほしいんだって。ミキちゃんも来ているの」

静かに佇むクラスメイトたち。

しばらくして、住居出入口から出てくるパジャマ姿のヨシオ。

顔には無数の発疹がある。

ミキ「矢野くん、大丈夫なの？」

ヨシオ「まあね」

テーブル席をひとつ占領して、ヨシオを取り囲むクラスメイトたち。  
タクロウもその輪の中に入っている。

ヨシオが握るスプーン。スプーンが曲がる。歓声上がる。

ミキ「やつぱり、スゴいなあ、矢野くんは。蕁麻疹が出ていても、曲げられるんだね」  
タクロウ「(憧れの眼差し) ねえねえ、兄貴、どうやってやってんの？」

常連客がカウンター席で蕎麦を食べている。

カウンターの前に立っているハツジロウとハルコ。

テーブル席の騒がしい声が聞こえている。

ハルコ「すみませんねえ、騒がしくって」

常連客「なあに？ ヨシオちゃん、スプーン曲げ、出来んのかい？」

ハルコ「って言うんですか？ ああいうの」

ハツジロウ「勉強や運動で人気者っていうんならいいんだけどねえ」

常連客「なに言ってるの？ スプーン曲げって言ったら、今、凄いだよ？ こないだ、テレビ

でもやってたよ。ほら、少年エスパーだっけ？」

ハツジロウ「エスパー？」

楽しいなテーブル席の方を見つめるハツジロウ。

スプーンを曲げ、笑っているヨシオ。

#### ○ファミリーストラン・駐車場

車内で、アナベルの顔を見つめているヨシオ。

アナベル「発疹ですね」

ヨシオ「…変なものでも、入ってたのかな？ あのサンドイッチ」

アナベル「発疹ですよ」

#### ○市街地の外れ・道

二人を乗せた車が走る。

アナベル「ヨシオ…薬、買いに行くよ」

ヨシオ「薬で治るの？」

アナベル「大体、治るよ」

#### ○薬局前

停車されたレンタカー。シャッターが締め切られている薬局。

無言で佇むヨシオとアナベル。

13 日営業再開との貼紙がシャッターに掲示されている『13』の数字。  
それを見つめるヨシオ。

○TVスタジオ・控え室（回想）

舞台袖の廊下に作られた控え室。

『13』と書かれたプレートを胸に付けたヨシオが、ただ平然と座っている。

隣から横並びに『14』以降の少年たちが座っている。スプーン曲げの練習をしている少年たち。反対側は空席。

舞台袖に立っていたスタッフが、ヨシオの近くまで歩いてくる。

スタッフ「えーっと、次は十三番の矢野ヨシオくん、こっちに来てくれるかな？」

ヨシオ「はい（立ち上がる）」

○同・客席（回想）

テレビの公開収録が行われているホール。

客席に座る、ハツジロウとハルコとタクロウ。

ハルコ「あの子、上手いこと出来るかしら」

ハツジロウ「心配ないよ。これまで、何本もスプーンを曲げてきたじゃないか」

舞台では、エントリーナンバー12番の少年が舞台袖に帰っていく。

ハルコ「あら。ヨシオは何番だったかしらねえ？（資料をぺらぺらと捲る）」

タクロウ「（舞台を見据えて）十三番。次だよ」

舞台に、司会の男とアシスタントの女が立っている。

アシスタント「つづいては、エントリーナンバー十三番。矢野ヨシオくんの挑戦です」

軽快な音楽でステージ中央の幕が開き、ヨシオが登場する。

客席、笑顔で手を振る三人。

ハツジロウ「ヨシオー！ いけるぞー！ オマエならやれるぞー！」

挑戦スタートを知らせる効果音。ヨシオ、持ったスプーンを見つめる。

司会「（抑えた調子で）さて、矢野ヨシオくんの挑戦が始まりました。今日は、寝台特急に乗って、はるばるやって来てくれました。ご両親と弟のタクロウくんも観客席で見守っています。

この緊張感の中で、果たしてスプーン曲げを決められるのでしょうか」

アシスタント「緊張しますからね、普段のようにリラックスして挑戦してほしいですね」

客席、静かに見守る三人。

ヨシオが持ったスプーンを見つめる。スプーンが曲がる。

司会「おーっと！ 曲がりました！ スプーンが見事に曲がっています！」

客席、喜ぶ三人。他の観客からも歓声。

アシスタント「素晴らしい！ 矢野ヨシオくん！ 見事にスプーンを曲げています！」

照明がヨシオの後姿のシルエットを浮かび上がらせる。



歓声と拍手が鳴り止まない。

○薬局前

『13』の数字を見つめるヨシオ。

無言のまま佇むヨシオとアナベル。

アナベル「開いてないね」

ヨシオ「しょうがないね」

○田舎道

郊外から離れた田舎道。

二人が乗ったレンタカーが走っている。

○車内

前を見据えている運転席のアナベルと、助手席のヨシオ。

ヨシオ「父さんに、酒を買って行きたいんだよ」

アナベル「もう。今更、言わないでちょうだいよ。そういうことを」

ヨシオ「ごめん」

アナベル「この先、お店なんて、ないでしょうが」

ヨシオ「あつたらでいいよ。あつたら、寄ってほしいんだ」

アナベル「絶対じゃないよ」

○田舎道

二人が乗ったレンタカーが走っている。

脇の歩道にロードレースをするランナーの集団が走っている。

最後尾集団のランナーたちを追い抜いていく車。

○車内

ランナーの姿に気づくアナベル。

アナベル「ほら、ヨシオ見てごらんよ。マラソンがやってるよ」

ヨシオ「ああ」

走っているランナーが流れていく窓ガラスからの光景。

アナベル「見て、見て。ずっと、続いているよ」

フロントガラスから見える長い道。歩道には、ランナーの長い行列。

それを見つめるヨシオ。

○通学路／実家・外（回想）

下校の時間。寂れた商店街。曲がり角を曲がって、実家の前の道を歩くヨシオ。蕎麦屋に長い行列が出来ている。入り口には、ハルコがいる。

行列の先頭の客「本当に、入れないの？」

ハルコ「申し訳ありませんが、あいにく、席がいっぱいになってしまつて。狭い店ですので、すみませんねえ」

歩いてくるヨシオに気づく、ハルコ。

ハルコ「ヨシオ！早くしなさい、お客さん待つてるから（手招く）」

足早にハルコの元に駆寄るヨシオ。

#### ○実家・蕎麦屋店内（回想）

ハルコが扉を開けると、店内に客が溢れている。

ヨシオが店内に入る。

客「（ヨシオに気づいて）待つてました！」

蕎麦を食べていた客もヨシオの方を振り向いて、騒然となる店内。

笑うヨシオ。ヨシオの背負っていたランドセルを預かるハルコ。

店内中央に置かれた手作りのお立ち台の前に立っているハツジロウ。

ハツジロウ「ヨシオ、スプーン曲げを見せてくれよ」

ハツジロウから、スプーンを渡されるヨシオ。ハツジロウはカウンターに戻る。

お立ち台に上がり、スプーンを見つめるヨシオ。

ヨシオの掲げたスプーンが曲がる。

客から驚きの声上がる。

カウンターの前に立つハツジロウとハルコ、拍手をして微笑んでいる。

賞賛の拍手を浴びるヨシオ。

#### ○車内

ランナーの行列を見ているヨシオ。

アナベル「何で、走るのかねえ。車に乗ればいいんだよ」

ヨシオ「…」

アナベル、アクセルを踏み込む。

#### ○田舎道→市街地

二人を乗せた車が加速していく。

歩道に走るランナーをどんどん追い越していく車。

田舎の風景。次第に建物が見えてくる。

先頭ランナーを追い越し、ランナーの姿が無くなる。

車は、市街地に入っている。

○酒屋・駐車場

停車している無人のレンタカー。

○同・店内

一升瓶の高い酒と安い酒が、棚に並んで置いてある。

それを見つめるヨシオ。

アナベル「いくら見たって一緒でしょうが。大体、あなた、お金、持ってるの？」

ヨシオ「…うーん」

アナベル「あなた、お金、持っていないよ。早く行きましょよ。時間無いんだから」

棚に置かれた高い酒と安い酒。

アナベル「ヨシオ、早くしてよ、もう」

ヨシオの腕を取り、引っ張るアナベル。

ヨシオ「痛いよ、アナベル」

引っ張られる腕。

それを見つめるヨシオ。

○実家・子供部屋（回想）

ヨシオとタクロウの学習机が二つ、反対向きで置かれている。

その前に椅子が背中合わせに置かれ、ヨシオとタクロウが座っている。

ヨシオは机に向かって宿題をしていて、タクロウはスプーンを握り、見つめている。

タクロウ「ああ、駄目だあ…（ヨシオの方を向き）ねえ、兄貴、教えてくれよ。曲げ方」

ヨシオ「うん…後でな」

タクロウ「何だよ、ケチだなあ」

また、スプーンを見つめるタクロウ。

タクロウ「…」

ヨシオの方を振り向くタクロウ。

タクロウ「やっぱ、教えてくれよ、兄貴」

タクロウ、ヨシオの腕を引っ張る。

ヨシオ「痛いよ、タクロウ」

タクロウ「頼むよ」

ヨシオ「分かったよ、もう」

ヨシオ、タクロウの方を振り向く。

ヨシオ「こういうものはなあ、強く念じるのが大事なんだ」

タクロウ「曲がれて？」

ヨシオ「そっだよ。曲がれて強く念じれば曲がるんだよ」

タクロウ「嘘だあ」

ヨシオ「本当だよ。ちょっと、それ、貸して」

タクロウ「ああ、はい（スプーンを渡す）」

スプーンを握り、見つめるヨシオ。

ヨシオ「曲がるな…曲がるな…」

スプーン曲がらない。

ヨシオ「曲がれ」

スプーン曲がる。

ヨシオ「ほら」

タクロウ「おお…やっぱり、兄貴はスゲエや」

憧れの眼差しでヨシオを見るタクロウ。

ヨシオ「タクロウもやってみな」

タクロウ「ようし」

曲がったスプーンをタクロウに渡し、机に身体を向けるヨシオ。宿題の続きを始める。

タクロウ、机に身体を向け、机の上に置かれていた新しいスプーンに持ち替える。

スプーンを見つめるタクロウ。

タクロウ「曲がれ…」

ドアの向こうからハルコの声が聞こえる。

ハルコの声「ご飯出来たわよ、早く二人ともいらつしやい」

宿題とスプーン曲げを中断する二人。

二人「はい」

ドアを開けっ放しのまま、部屋を出るヨシオとタクロウ。

### ○酒屋・店内

引っ張られる腕を見つめるヨシオ。

手を離すアナベル。

アナベル「ヨシオは痛がりなんだねえ、まったく」

ヨシオ「…」

アナベル「先、戻ってるよ」

ヨシオ「うん」

出入り口の方へ歩いていくアナベル。

ヨシオ、棚の酒を見つめる。

### ○同・駐車場

停車している無人のレンタカー。

酒屋の出入り口からアナベルが歩いてくる。車のキーを開けて、車内に入る。

○車内

アナベル、運転席に座っている。

アナベル「(鼻で溜め息をつく)」

ぼーっとしているアナベル。

暫くして、バックミラーを動かし、顔の発疹の状態を確認する。

発疹は退いている。

○酒屋・駐車場

停車しているアナベルが乗っているレンタカー。

酒屋の出入り口から、包装された一升瓶を持ったヨシオが歩いてくる。

車内に入る。

○車内

運転席にアナベル。

助手席にヨシオが座り、酒を抱える。

その酒を無言で凝視するアナベル。

アナベル「…」

○酒屋・駐車場

二人が乗った車にエンジンが入る。

バックでゆつくりと動き出し、切り返す。

アナベル「じゃあ、行きますよ」

ヨシオ「疲れてない？」

アナベル「ないよ」

ヨシオ「ガソリンは大丈夫？」

アナベル「心配ないよ。たっぷり入ってるよ」

舗道に出た車が走り始める。

○田舎道

田園風景。二人を乗せた車が走る。

○車内

沈黙している車内。

前を見据えているアナベル。ちらっとアナベルの顔を見るヨシオ。

ヨシオ「だいぶ、退いてきたね」

アナベル「…」

ヨシオ「顔の発疹」

アナベル「…」

ヨシオ「疲れてない？」

アナベル「…」

ヨシオ「ガソリン大丈夫？」

アナベル「…」

ヨシオ「（鼻で溜め息をつく）」

アナベル「ねえ、ヨシオ。あたし、トイレ行くから、行ける場所見えたら言っってちようだいね」

窓の外を見るヨシオ。畑があるだけ。

ヨシオ「うん」

#### ○田舎道・工事現場前

走る車、工事現場に突き当たる。

作業員が一人立っていて、車を制止する。

#### ○車内

前を見据えているアナベル。

作業員、一時停止の信号号を送る。

アナベル「ふざけるなよ（吐き捨てる）」

窓の外を見ているヨシオ。

アナベル、貧乏揺すり。

周りは田園。田園の中に、ぼつんと案山子が立っている。

それを見つめているヨシオ。

#### ○中学校・教室（回想）

ホームルームの時間。『信念』という漢字が記された額が、黒板の上に掲示されている。

教卓に担任が立っている。

担任「あと前も言ったように、好きな部活を見学させてもらって自分の入りたい部活を出来るだけ

け早めに決めておくように…」

学ラン姿のヨシオが席に着いている。

セーラー服姿のミキが席に着いている。

小学校の同級生も数名いて、おしゃべりしている。

渡辺「おい矢野。超能力部はないからな！」

生徒たち、笑う。ミキも笑っている。

担任「おいおい、騒ぐな騒ぐな」

騒がしい教室が静かになる。

一番後ろの席の向井がヨシオを見ている。

担任「それでその後、仮入部ってというのがあから」

○同・廊下（回想）

教室から下校する生徒が出てくる。

○同・教室（回想）

帰り支度をしている生徒たち。黒板に日付を書き換える渡辺。

鞆に教科書を詰めているミキ。その側に、鞆を背負った大山が立っている。

大山「ねえねえ、ミキ。部活、決めた？」

ミキ「そうだなあ。あたしはテニスかな？」

大山「でも運動の部活は大変じゃない？」

ミキ「あたし、身体動かすの好きだから」

そのやり取りを気にしながら、鞆を背負うヨシオ。そこに向井が歩いてくる。

向井「なあ……お前、矢野って言っただけ？」

ヨシオ「うん」

向井「さつき、超能力がどうとかって言ってたよな。なんか出来るの？」

ヨシオ「（嬉しそうに）スプーン曲げ」

向井「へえー。それって、今も出来るの」

ヨシオ「うん」

ヨシオ、鞆の中にあつた大量のスプーンを、机の上に出す。

向井「いつも持つてるの？」

ヨシオ「まあね」

向井「やってみてよ」

ヨシオ「うん」

スプーンを一本持ち、見つめて、曲げる。

向井「おお！ すごいね」

ミキは大山と喋っている。

それを見るヨシオ。

新しいスプーンを曲げてみせるヨシオ。

向井「何回でも出来るんだ。すごいね」

二人の側を、鞆を持った渡辺が通りかかり、ヨシオの机の大量のスプーンを見る。

渡辺「なんだよオマエそれ？ 買ったの？」

渡辺の大きい声に、教室に残っていた生徒たちが、ヨシオの席の方を向く。

ヨシオ「うん。親が」

渡辺「（呆れたように）すごいねえ」

渡辺が出入り口の方に歩いて行く。

渡辺「（大きい声で）スプーン屋でも始めるかあ」

それを聞いていた生徒たち。くすつと笑う。その中にミキもいる。

向井「でもオマエ、すげえよ。実際」

ヨシオ「…」

少し笑うヨシオ。

#### ○車内

案山子を見つめているヨシオ。

前に向き直すヨシオ。

作業員、一時停止の手信号。会釈する。

アナベル、貧乏揺すり。

窓の外を見るヨシオ。

『急勾配10%』の交通標識が見える。

それを見つめるヨシオ。

#### ○旧校舎・外（回想）

旧校舎の前に背を向けて立つ向井と不良。肩を斜めに傾けた特徴的な立ち方。

その前にはヨシオが立っている。

向井「ここがオレたちの溜り場になってる、旧校舎。今は使用禁止になってる」

ヨシオ「…」

向井「入り口も、当然、開いてない」

扉の前に、使用禁止の貼紙。

#### ○旧校舎・廊下（回想）

物置状態になっている汚い校舎内。

三つの窓を開け、それぞれの窓を越えてヨシオ、向井、不良が入ってくる。

向井「だから、ここが玄関」

不良「ところで、コイツ、本当に面白いこと出来るの？ 嫌だぜ。その時になって、つまんねえ

ことやられても」

向井「…問題ないよ。（ヨシオに）あれは持ってきてくれたよな」

ヨシオ「うん」



廊下を歩く三人。

○旧校舎・教室（回想）

物置状態の汚い教室。電気が点いていない。窓の明かりが教室内に入り込んでいる。煙草の煙が充満している。

黒板の上に、『友情』と書かれた額。埃まみれで割れている。

扉が開く。向井を先頭にして、不良とヨシオも入ってくる。

番長、番長の女、番長の取り巻き数名が机を椅子代わりにして座っている。

番長「連れてきたの？ 矢野だっけ？」

ヨシオ「はい」

番長「何やってくれるの？」

ヨシオ「スプーン曲げ」

番長「やってみなよ」

ヨシオ、鞆の中から大量のスプーンを出し、中から一本を握る。

番長「ああ、ちよつと待って。そういうのって仕掛けがあるんじゃないの？」

ヨシオ「仕掛けは無いです」

番長「（取り巻きに）ちよつと、確認してみなよ」

取り巻きたち、スプーンの中から一本取り、それぞれ、力で曲げてみる。

不良「ああ、普通のやつすねえ、コレは」

番長「どれ？（不良からスプーンを取り）ああ、普通の固いやつに、なってるわけか」

向井「矢野、やってみな」

ヨシオ、スプーンを見つめる。スプーン曲がる。

一同から驚きの歓声。番長の女は無表情。

番長「（喜び）嘘だろ？ これも出来る？」

番長、スプーンをヨシオに渡す。

ヨシオ「出来ますよ」

ヨシオ、スプーン曲げる。

一同から賞賛の声。番長の女は無表情。

番長「矢野、お前は、すげえ奴だ」

にやけるヨシオ。

番長「どうやってやんだよ、教えてくれよ」

ヨシオ「ああ…えつと」

ヨシオ、新しいスプーンを持つ。

ヨシオ「まず、こういう感じで持ってもらって…」

一同、ヨシオの姿を真似てスプーンを持つ。番長の女は、ヨシオを見ている。

ヨシオ「それで強く念じれば曲がるはずなんですけど…曲がるな、曲がるな、曲がれ」

ヨシオの持ったスプーンだけ曲がる。

番長「(大喜び) 凄すぎるだろ? 矢野」

矢野を見つめる番長の女。

○車内

交通標識を見つめるヨシオ。

アナベルの貧乏揺すりが止まる。

前を向き直すヨシオ。

運転席の窓を開けるアナベル。

○田舎道・工事現場前

作業員、一時停止の手信号。

車の窓から顔を出すアナベル。

アナベル「ねえ、ちょっと、お兄さん。この辺りにトイレはないかしらねえ」

作業員「ああ。もう少し先、行けば、道の駅があるけど」

アナベル「ああ」

○車内

窓を閉めるアナベル。

アナベル「道の駅だつてよ」

ヨシオ「行ってみようか」

○田舎道・工事現場前

作業員、直進の手信号を送る。

車が動き始める。

アナベル「あたし、運転、もう疲れたよ」

ヨシオ「え?」

アナベル「トイレ、終わったら交代ね」

ヨシオ「うん」

○道の駅・駐車場

駐車されているレンタカー。車から外に出るヨシオとアナベル。

アナベル「ああ、疲れた」

ヨシオ「ずっと運転してたからね」

アナベル「なんで、ヨシオは、代わってくれないのよ? こっちは、お腹に赤ちゃんもいるんだ

からさあ。少しは考えてもらわないと」

ヨシオ「…ごめん」

アナベル「わたし、トイレ行つてくるよ」

足早にトイレに向かうアナベル。

ヨシオ「うん…僕も行くよ」

アナベルに付いて行くヨシオ。

○同・トイレ前

隣接する男女入り口の前に立つヨシオとアナベル。

アナベル「あまり時間かけないでよね」

女子トイレに入つて行くアナベル。

壁に標される男女マーク。

それを見つめるヨシオ。

○旧校舎・校舎裏（回想）

放課後。窓を開けるヨシオ。

そこによじ上る。

○旧校舎・廊下（回想）

三つある窓。一つ開いている。

外からヨシオが入ってくる。

○旧校舎・教室（回想）

扉が開く。ヨシオが入ってくる。

教室内には番長の女が一人。煙草を吹かしながら、机に座っている。

ヨシオの方を向く、番長の女。

ヨシオ「…」

番長の女、ヨシオの元に歩いてきて、勢い良く扉を閉める。

ヨシオ「…」

机に座つて足を組み、ヨシオを見る番長の女。

ヨシオ、無言のまま、鞆の中からスプーンを一本出すヨシオ。

番長の女「今日は、そういうんじゃねえんだ」

ヨシオ「…」

番長の女、煙草を灰皿で消し、立ち上がり、ヨシオの元に歩み寄る。

番長の女「今日は、そういうんじゃねえから」

ヨシオを見る番長の女。

ヨシオ「…」

番長の女「誰にも言うなよ」

小さく聞こえ始める、校内放送。

『蛍の光』の音楽が流れる。

○中学校・廊下（回想）

大きく聞こえる校内放送。『蛍の光』にのせ、下校を促す声が流れる。

放送の声「下校の時間になりました。教室に残っている生徒は、速やかに下校しましょう」

下校する生徒たちが廊下を歩いている。

○旧校舎・教室（回想）

小さく聞こえる『蛍の光』。ヨシオの前に番長の女が立っている。

番長の女「今日は…」

ヨシオ「…」

番長の女「こういうんだから」

番長の女の手がヨシオの学ランの第一ボタンにゆっくり延び、はずされる。

ヨシオの持っていた、スプーンが床に転がる。

○旧校舎・廊下（回想）

誰もいない廊下。窓から覗く夕焼け。

ヨシオの声「あっ!!」

○道の駅・トイレ前

男女マークを見つめるヨシオ。

トイレに入る。

○同・トイレ

壁にいくつかの落書きがされている。

ヨシオ、小便の便器の前に立ち、用を足す。ヨシオの丁度、目の前の壁に落書き。

『SEX』の文字。

それを見つめるヨシオ。

○旧校舎・廊下（回想）

誰もいない廊下。窓から覗く夕焼け。

ヨシオの声「あっっ!!」

○道の駅・トイレ

用を足し終わり、トイレを出る。

○同・駐車場

無人の車の脇に立ちすくむヨシオ。

ドアを開けようとするが、鍵が開かない。

ヨシオ「…」

トイレの方を振り向く。

○同・自動販売機前

カップ用の自動販売機。

中央の排出口。カップに排出し終わる。

それを確認したヨシオ、コーヒーの入った紙コップをゲートから取り出す。

奥に見えるトイレの方に目をやるが、アナベルの姿は無い。もうひとつ同じ物を買い、確認しながら排出を待つ。その前をアナベルが素通り。排出し終わった、コーヒーを取り出し、アナベルを待つヨシオ。両手に紙コップを持ち、立ち続ける。暫くして、クラクションの音が鳴る。

○同・駐車場

車の中、助手席からクラクションを鳴らしているアナベル。コーヒーを二つ持ったヨシオが、車に駆寄る。それにアナベルが気づき、クラクションが鳴り止む。

○車内

一升瓶を抱え助手席に座る、アナベル。ヨシオが、運転席に座る。

ヨシオ「戻ってたんだ」

アナベル「ヨシオ。あなた、遅すぎるよ。時間ないんだからさあ」

ヨシオ「ごめん…コーヒー飲まない?」

アナベル「あたし、コーヒー嫌いななのよ」

○道の駅・駐車場

車が動き出す。

車が止まる。

○車内

沈黙する二人。

アナベル「何で?」

ヨシオ「ガス欠だね」

○道の駅・駐車場

停車する車の脇に立つ二人。

アナベル「どうするのよ、ヨシオ、実家まで歩いて行くの？」

ヨシオ「歩いて行ける距離じゃないよ。それに、キミの身体じゃ、歩けないだろ？」

アナベル「もちろん、歩かないわよ」

沈黙する二人。

ヨシオ「僕が、ガソリンを買いに行くよ」

アナベル「あなたが？」

ヨシオ「ここにくる途中、ガソリンスタンドがあったと思う」

アナベル「ああ」

ヨシオ「近くはないけど、たぶん、遠くもないはずだよ。先だと一向にない可能性もあるしね……」

アナベル「そうやって、考えている時間が勿体ないんだよ」

ヨシオ「うん。兎に角、僕が行ってくるよ」

アナベル「そうね。あなたが運転していたんだものね」

ヨシオ「……」

アナベル「でも、タンクか何かがないと、スタンドに行ったところで、バカをみることになるん

じゃないの？ ヨシオ」

ヨシオ「確かにそうだね……せめて、ペットボトルでもあればね」

アナベル「あるじゃない」

○坂道（夕方）

日が沈む途中。坂の上から見える坂道。

坂の下から歩いてくるヨシオの頭が見える。坂を登るヨシオ。ヨシオの身体が見える。

ヨシオの手には空の一升瓶がある。重い足取り。

○ガソリンスタンド（夕方）

セルフのガソリンスタンド。一升瓶を抱えたヨシオが給油機の前まで歩いてくる。

瓶を地面に置く。高い酒の瓶。

それにガソリンを入れるヨシオ。

二人乗りのライダーが、スタンドに入ってきて、ヨシオの隣の給油機にバイクを停める。

二人乗りのバイク。

それを見つめるヨシオ。

○旧校舎・校舎裏（回想）

放課後。校舎裏から見える青空。

番長が仰向けに倒れるヨシオの前に仁王立ちしている。

番長「超能力とは違うけど、俺も能力を持つてるんだ。拳三発で、相手を半殺しにする能力。ただ…女を盗られた時に限っては、たったの一発で半殺せる」

「ヨシオ、鼻血を出して気絶している。」

ヨシオ「…」

番長「スゴイだろ？ 少年エスパー」

青い空の下、倒れたまま動かないヨシオ。

歩いていく番長。

目を開くヨシオ。夕暮れの空が見える。

○通学路（回想）

夕暮れ。帰宅するヨシオ。前から自転車が走ってくる。それを見るヨシオ。

男前と二人乗りをするミキ。楽しげにおしゃべりをしている二人。ヨシオには、気づかず、脇を通り過ぎる。

○ガソリンスタンド（夕方）

二人乗りのライダーを見つめるヨシオ。

一升瓶の口から、ガソリンが溢れ、地面にこぼれる。

○坂道（夜）

暗闇の中、坂を下るヨシオ。

○道の駅・レストラン前（夜）

車へ向かうヨシオ。道の駅内のレストラン前を通る。ガラス張りの窓。外から中の様子が見える。アナベルが食事をしている。

ヨシオ「…」

○レストラン・テーブル席（夜）

席につき、暖かい蕎麦を食べている。その前に立ちすくんでいるヨシオ。ふうふうしながら蕎麦を威勢良く啜る音が響く。

ヨシオ「お腹へつたの？」

アナベル「ヨシオも早く食べちゃいなさい。時間ないから」

ウエイターがやってくる。

ウエイター「お客様、コーヒーのお替わりはいかがでしょう」

アナベル「もちろん、いたたくわ」

○道の駅・レストラン前(夜)

テーブル席に座っているヨシオとアナベルが窓の向こうに見える。

○レストラン・テーブル席(夜)

ヨシオとアナベルが対面で座っている。

コーヒーを飲むアナベル。

アナベル「ねえ。今日は一度、ホテルか何かで休まない？ 夜中に着いてしまっても、かえって失礼でしょ。違う？」

ヨシオ「まあね」

アナベル「じゃあ、決まりね」

コーヒーを飲むほすアナベル。

ヨシオ「…」

ウェイターがやって来る。

ウェイター「オムライスのお客様」

ヨシオ「はい」

ヨシオの前にオムライスが置かれ、ナプキンとスプーンが置かれる。

スプーンを見つめるヨシオ。

○実家・蕎麦屋店内(回想)

夜中。静寂と暗闇。店内中央のお立ち台に腰をかけているヨシオ。スプーンを持って、見つめている。

ヨシオ「(呟き) 曲がれ、曲がれ、曲がれ」

曲がらないスプーン。目に涙を溜めているヨシオ。

ヨシオ「…」

スプーンを見るヨシオ。

ヨシオ「曲がれ、曲がれ、曲がれ」

曲がらないスプーン。ヨシオの目から涙。

ヨシオ「曲がれ！ 曲がれ！ 曲がれ！」

曲がらないスプーン。ヨシオ、号泣。

ヨシオ「あああああっ！！」

スプーンを力づくで曲げるヨシオ。スプーン曲がる。

ヨシオ「あああああっ！！」

カウンター席に置かれた段ボール箱。表に引きずり出す。段ボールが倒れる。床に大量のスプーンが散らかる。

ヨシオ「あああああっ！！」



散らかったスプーンから一本取り、カづくで曲げる。曲がるスプーン。

ヨシオ「あああああっ!!」

カづくで曲がるスプーン。

ヨシオ「ああああああっ!!」

○実家・外（回想）

夜明け。営業前の蕎麦屋が日に照らされている。

○実家・蕎麦屋店内（回想）

住居の出入り口から出て来る、ハツジロウとハルコ。目をこすりながら欠伸をする二人。

店内にスプーンが散乱している。ヨシオがカウンターに伏して眠っている。

二人「あ?」

スプーンはすべて曲がっている。

○レストラン・テーブル席。（夜）

スプーンを見つめるヨシオ。

テーブル席に座っているヨシオとアナベル。

アナベル「さつさと食べて、さつさと行きましょう。（手を挙げて）ちょっと、お兄さん? コ

ーヒーのお替わりお願い」

箸を鞆から出し、オムライスを食べるヨシオ。

○舗道くガソリンスタンド（夜）

道の駅から出て来る二人を乗せた車。

舗道に出る。

アナベル「じゃあ、まずホテルを探しましょう」

ヨシオ「その前に、ガソリンスタンドに寄らないと。あの量じゃ、ろくに保たないからね」

アナベル「仕方ないね」

車の進む先にガソリンスタンドの看板が見える。

○車内（夜）

前を見据えている二人。

アナベル「（指を指す）あの看板は違う?」

ヨシオ「どれ?」

アナベル「あれよ、あれ」

ガソリンスタンドが見える。

ヨシオ「…」

○ガソリンスタンド（夜）

車内に座る二人。ガソリンを入れられる車。アナベルがお会計をしている。

○車内（夜）

アナベルがお会計を済ませる。

ヨシオ、従業員募集の貼紙を見る。時給の部分に新しい紙が貼付けられ、時給が改められている。

それを見つめるヨシオ。

○実家・蕎麦屋店内（回想）

朝。カウンターで作業をしているハルコ。出入り口に向かうヨシオ、ハルコの側で足を止め、背後からその様子を見る。ハルコ、小さい用紙に『た』の文字をマジックで書いている。

ヨシオ「…」

出入り口の戸を開けるヨシオ。

ヨシオ「行ってきます」

ハルコ「はい、行ってらっしゃい。気をつけてね」

出入り口から外に出て、戸を閉じる。

○実家・外（回想）

夕方。学校から帰って来るヨシオ。蕎麦屋の出入り口の前で立ち止まる。

戸には、紙が貼られている。『超能力少年のいる店』の貼紙。『る』の部分が新しい『た』の紙に差し替えられている。

○車内（夜）

従業員募集の貼紙を見ているヨシオ。

ヨシオ、車のエンジンをかける。

アナベル「今度、返してよね。金」

○ガソリンスタンド（夜）

二人の乗る車が、ガソリンスタンドから出て舗道に入る。

○ビジネスホテル・外（夜）

駐車場に入ってくる車。

○同・ロビー（夜）

受付に男が座っている。その前にヨシオとアナベルが立っている。

受付「いらっしやいませ。お二人ですか？」

アナベル「二人に決まっているじゃない。お腹の赤ん坊の値段まで取るつもりね？」

受付「申し訳ございません。お部屋は数種類ございますが、どれになさいますか？」

アナベル「えっ何？ どういう感じになっているの？」

ヨシオ「一番安い部屋でいいんじゃないかな」

アナベル「疲れとれないよ、そんな部屋じゃ」

受付の男、苦笑いを浮かべる。

受付「こういう感じのお部屋になります」

受付の男、部屋のパンフレットを出す。

ランクの違う部屋が数種類載っている。

アナベル「へえ〜…すごい値段ね」

受付「（苦笑）如何致しましょう？」

アナベル「今日はこれにしとくわ。（パンフレットの写真を指す）ヨシオもこれでいいでしょ？」

ヨシオ、パンフレットを覗く。アナベル、一番安い部屋を指している。

ヨシオ「うん」

受付「こちらがキーになりますね。それでは、ごゆっくりどうぞ」

受付の男の出したキーを受け取るアナベル。

部屋に向かう二人。ヨシオ、立ち止まる。

ヨシオ「実家に電話かけていいかな？ 今日中に着くって言っちゃったんだ」

アナベル「好きにしなよ。わたし、先、部屋行ってるよ」

ロビー。公衆電話の受話器を取り、電話をかけるヨシオ。受話器を耳に当てる。

ヨシオ「…」

電話の不通音が鳴る。

すぐ側の壁に絵画が飾られている。黒一色で塗り潰された絵。絵の下に『白』というタ

イトル札。それを見つめるヨシオ。

不通音が鳴り続ける。

○中学校・教室（回想）

状況音は無く電話の不通音が鳴っている。

休み時間。無表情で席に着いているヨシオ。クラスメイトが教室ではしゃいでいる姿を見ている。ミキが笑っている。渡辺が笑っている。大山が笑っている。みんな笑ってい

る。無表情で席に着いているヨシオ。机に顔を伏せる。  
黒画面。

○ビジネスホテル・ロビー

絵画『白』を見めるヨシオ。  
受話器を電話に下ろす。

ヨシオ「…」

○同・部屋

部屋のドアを開け、ヨシオが入って来る。  
殺風景な部屋。電気が点いている。  
ベッドがひとつしかない。  
布団を掛けベッドで熟睡しているアナベル。

ヨシオ「…」

電気を消す。ヨシオ、床で横になる。  
目をつぶるヨシオ。

○夢

実家の蕎麦屋のテーブル席に座るヨシオ、タクロウ、ハツジロウ、ハルコ、妊娠して  
ないウエディングドレス姿のユウコ、妊娠しているアナベル。

高い酒がテーブルに置かれている。ラベルに『ガソリン』の文字。

ハツジロウ「ヨシオ、ガソリン買ってきてくれたのか？高かっただろう？」

ヨシオ「安い方と迷ったんだけどね」

タクロウ「よかったよ。父さんが元気そうで」

アナベル「元気じゃないよ」

ユウコ「お母さん、カレー出来たんじゃないですか？」

アナベル「出来てないよ」

ハルコ「カレー出来たわよ」

カレーライスを持っているハルコ。

テーブルの上にカレーライス人数分。

アナベル「スプーンがないよ」

ヨシオ「母さん、スプーンは？」

タクロウ「母さん、スプーンは？」

ユウコ「お母さん、スプーンは…？」

ハツジロウ「おい、スプーンは？」

ハルコ「ここに沢山あるわよー！」

ハルコが抱えた段ボールを傾け、中に入っていた大量のスプーンをテーブルの上にぶちまける。スプーンはすべて曲がっている。

全員、スプーンを持ちテーブルを囲む。

アナベル「ヨシオ。こんなスプーンじゃ、食べれないじゃない」

全員「いただきます！」

全員、食いづらそうに曲がったスプーンでカレーライスを食べる。

全員「ごちそうさまでした！」

笑うヨシオ。隣りにいるアナベル。

アナベル「ねえ、ヨシオ…カレーついてるよ」

ヨシオの服にカレーが溢れている。

それを見つめるヨシオ。

#### ○ビジネスホテル・部屋（朝）

窓の外が明るい。床で眠っているヨシオが、目覚める。上体を起こし、ぼーっとする。

ベッドに眠るアナベルの方を見る。

掛け布団が投げ出されている。アナベルの衣服の裾が捲れていて、ミラーボールの一部が見えている。

ヨシオ「…」

ヨシオ、ゆっくりと立ち上がり、アナベルの側に歩み寄る。

アナベルの衣服の裾を捲るヨシオ。

アナベルの腹から床に、ミラーボールが転がる。

それを見つめるヨシオ。

#### ○同・ロビー（朝）

玄関から光が差し込んでいる。玄関の方に歩いて行くヨシオ。絵画『白』を見る。

玄関から差し込んだ光が、絵を照らし、白く見える。

#### ○同・外（朝）

ホテルから出て来る車。ヨシオが一人乗っている。

#### ○高速道路（朝）

周りの車を追い越して行くヨシオの車。

#### ○実家・外

家の前にフェラーリが止まっている。ヨシオの車が到着し、その後ろに停車する。

車から降り、蕎麦屋の入り口前で立ち止まる。戸には『閉店』を示す汚れた貼紙。

戸を開けようとするが、閉まっている。

玄関に続く細道に入って行くヨシオ。

○同・玄関前

ヨシオ、扉のノブを捻るが開かない。ノックをする。しばらくして、扉が開き、中からハルコ出て来る。

ハルコ「あらヨシオ、おかえり」

ヨシオ「ただいま」

ハルコ「タクロウとユウコさん、もう着いてるわよ…随分、遅かったわね」

○同・玄関く廊下

並んで歩くハルコとヨシオ。

ハルコ「あなた、フィリピンの子はどうしたの？」

ヨシオ「具合が悪くなったんだ」

ハルコ「大丈夫なの？」

ヨシオ「まあね。ところで、父さんの具合は大丈夫なの？」

ハルコ「良いとはいえない。早速、会ってきたら？」

ヨシオ「何処に居るの？」

ハルコ「寝室でビデオ観てるわよ…少年エスパーの」

○同・寝室

戸を開けて部屋に入るヨシオ。テレビに砂嵐が映っている。布団が敷かれていて、そこにハツジロウが横たわっている。

ハツジロウ「…くれよ」

ヨシオ、無表情でハツジロウ見る。

ハツジロウ「ヨシオ…」

目を見開き、天井を見つめているハツジロウ。

ハツジロウ「くれよヨシオ…」

ヨシオ「…」

ハツジロウ「ヨシオ、スプーン曲げ…くれよ…ヨシオ、スプーン曲げを見せてくれよ」

ヨシオ無言のまま、ビデオデッキの操作をする。反応がない。

取り出しのボタンを押すと、ビデオが出て来る。抜き出すと、テープが延びきっている。

ビデオを床に置くヨシオ。

ハツジロウ「ヨシオ、スプーン曲げを見せてくれよ」

部屋を出るヨシオ。

○同・居間

テーブルに座るヨシオ、タクロウ、ハルコ。テーブルの上には、コーヒーカップが三つ置いてある。ヨシオの前には無い。

ユウコが新しいコーヒーを持って来る。

ユウコ「ヨシオさん、砂糖とミルクはどうしますか？」

ヨシオ「このままでいいよ」

ハルコ「ユウコさん、いいのよ気使わないで。身重なんだから」

ユウコ「遠くから来て大変だったでしょうから、このくらいはしてあげないと」

タクロウ「オレにもお替わりもらえる？」

ユウコ「あなた、自分で注いでよ。わたし、身重なんですから（席に着く）」

タクロウ「はいはい」

タクロウ、立ち上がり台所に向かう。

ユウコ「そう言えば、結婚式以来ですよね」

ヨシオ「そうだね」

ハルコ「本当に憶えてるの？ あなた、酔い潰れていたじゃないの？」

ヨシオ「そうだったけ？ 憶えてるよ」

ユウコ「私が、どんなドレス着ていたか、憶えてます？」

ヨシオ「当然だよ。真っ白いウエディングドレス」

ユウコ「ひどい。（嘘泣き）漆黒のドレスだったのに」

ヨシオ「え？ そうだった？」

ユウコ「（笑う）そんな訳ないじゃないですか。真っ白いドレスで正解です」

ハルコ「もう、ユウコさんったら、お茶目ね」

突然、台所からタクロウの声が聞こえる。

タクロウの声「ねえ、母さん、スプーン何処にあるの？」

ハルコ「スプーンなら、三十年前、ヨシオが全部曲げちゃったつきり一切買ってないわ」

ヨシオ「…」

ハルコ「何か適当な棒でも使っちゃいなさいよ。どうせ混ぜるだけでしょ」

タクロウの声「わかった」

ユウコ「ヨシオさん、小さい頃、超能力でスプーン曲げられたんですよね？ あの時から聞いた

んですけど」

ハルコ「むかしの話よ」

タクロウ、コーヒー片手に戻って来る。

タクロウ「何？ 兄貴の話？」

ユウコ「聞かせて下さいよ、その話」

ハルコ「（冗談めかして）大した話じゃないわよ。スプーン曲げって言っても、結局、スプーンを使い辛くしているだけなんだから。実際、超能力のお陰でお店の景気もよくなったけど…」

ユウコ「凄くないですか」

ハルコ「それは、有難いと思ってる。でも、なんだかんだ言っつて、スプーン代の方が高くついちやっただくらいだからね」

ユウコ「披露宴の時に見せてくれれば、盛り上がっただろうなあ…ねえ、あなた」

タクロウ「（ユウコを無視して）それより母さん、腹減ったよ」

ハルコ「そうねえ…カレーくらいしか作れないけど。（ヨシオに）あなたも今日は泊まっていけるんでしょ」

ヨシオ「うん」

ユウコ「お母さん、あたしも手伝います」

台所へ向かうハルコ。

ユウコもついて行く。

居間に残ったヨシオとタクロウ。

台所からハルコが戻って来る。

ハルコ「あなたたち、スプーン買ってきてもらえるかしら」

○商店街の道く金物屋（夕方）

閉店した店が密集する商店街。

ヨシオとタクロウが、並んで歩いている。

タクロウ「ゼリー工場の仕事は上手くいってる？」

ヨシオ「ゼリー工場はもう辞めたんだ。今はプリン工場で働いてる」

タクロウ「そっか。そっちは上手く行ってる？」

ヨシオ「それも昨日、辞めた」

タクロウ「次の仕事の当てはあるの？」

ヨシオ「そうだなあ…ヨーグルト工場でも探すかな」

タクロウ「そっか」

小さく微笑み、歩き続ける二人。

タクロウ「（周りを見ながら）しかし…開いているスプーン屋なんて、あるのかな」

ヨシオ「あるだろ…何処かには」

タクロウ「あの金物屋はどうだろう？」

金物屋の方を指すタクロウ。

○金物屋・店内

品揃えの悪い店内。

通路を歩きながら、棚を見回す二人。

タクロウ「生まれて来る子供の名前、まだ決めていないんだ。兄貴、何かいい名前はないかな？」

ヨシオ「お前、作家やっつてんだから、そういうのは得意のはずだろ？」



タクロウ「うん…苦手なんだ、そういうのは。小説でも、登場人物はみんな知り合いの簡単な名前ばかり。井川とか永原とか渡辺とか根本とかね」

ヨシオ「そんな名前つけるつもりか？ 子供に」

タクロウ「そうだ、今度ヨシオっていう主人公の物語を書こうとしているんだ…」

ヨシオ「へえー」

タクロウ、棚を見渡す。

タクロウ「スプーンはどこだろう？ …（レジに向かって）すみませんが、スプーンはどこですか？」

レジから渡辺が歩いて来る。

ヨシオ「…」

渡辺「なに？ スプーン？」

タクロウ「四本欲しいんですけど」

渡辺「（別の棚を指し）スプーンはこっちの棚だね。四本だっけ？」

ヨシオ「…」

○同・外（夕方）

金物屋は『渡辺金物店』の看板を掲げている。

渡辺の声「いけね。三本しかないよ…それでもいいかな？ …悪いね」

○実家・玄関廊下く台所（夕方）

ドアを開けて、タクロウとヨシオが入って来る。

タクロウ「うん、いい匂いだ」

台所にカレーを作るハルコとユウコの背中。台所を通るタクロウとヨシオ。

ハルコ「（振り返り）おかえり。カレーもうちょっとかかりそうなの。スプーンは買ってきた？」

タクロウ「三本しかなかったんだ」

ユウコ「曲がったスプーンって、もうないんですか？ 三十年前の」

ハルコ「そうねえ、探せば見つかるかもね」

ヨシオ「…」

ハルコ「（ヨシオとタクロウに）あなたたち、もうちょっと、待っていてよ」

タクロウ「…兄貴、おれらの部屋でもみてみようか」

○同・子供部屋

ヨシオとタクロウの学習机が二つ、反対向きで置かれている。

その前の椅子に腰をかけている二人。

タクロウ「さっきの話なんだけどさ」

ヨシオ「なんだったっけ？」

タクロウ「ヨシオっていう主人公の物語の話」

ヨシオ「ああ」

タクロウ「実は、兄貴自身の半生を描きたいと思ってるんだ」

ヨシオ「つまらない人生だよ」

タクロウ「兄貴、それはオレの信念への批判だよ。オレは兄貴のすべてに憧れているんだから」

ヨシオ「ろくにプリンも作れない兄貴だよ」

タクロウ「関係ないよ。超能力があるじゃないか」

ヨシオ「それだって、もう使えない」

タクロウ「違うよ兄貴。超能力が使えたという時点で偉大なんだよ」

ヨシオ「…」

タクロウ「父さんが、まあ、ああいう状態…俺や母さんのこと、忘れてしまって、兄貴とスプー…ンのことだけ呟いていただろ？」

ヨシオ「……」

タクロウ「俺には、あの父さんの姿が、なんとなく分かる気がするんだ」

虚空を見つめる二人。

ヨシオ、タクロウを見る。

ヨシオ「ところで、タクロウ。ズルズルになったビデオテープって直せるのかな」

タクロウ「えっ？ …ズルズルかあ？ それはさすがに、アレなんじゃないかな」

ドアの向こうからハルコの声が聞こえる。

ハルコの声「ご飯出来たわよ、早く二人ともいらっしやい」

タクロウ「いま行くよ」

ドアを開けっ放しのまま、部屋を出るヨシオとタクロウ。

### ○同・居間

テーブルの上に四人分のカレーライスとスプーンが置かれている。ハルコとユウコが台所と居間を行き来して、食事の用意をしている。

タクロウとヨシオが居間に入って来る。

そこにハルコが通りかかる。

ハルコ「あなたたち、邪魔だから、適当なところに座つといて」

適当な席に座るヨシオとタクロウ。

用意が終わり、席に着くハルコとユウコ。

ハルコ「それじゃあ、いただきますしろうか」

全員「いただきます」

ヨシオの前にはカレーライスと曲がった三十年前のスプーンが置いてある。他の三人はカレーライスを食べている。

ヨシオ、曲がったスプーンを手に取り、自力で捻り、スプーンを真直ぐに戻す。

カレーライス食べるヨシオ。

○同・寝室

布団に横たわるハツジロウ。居間でカレーを食べる音が聞こえる。

目を見開き、天井を見つめているハツジロウ。居間からの音が突然消える。

ハツジロウ「ヨシオ、スプーン曲げを見せてくれよ」

○エンドロール

○田舎道

ヨシオの乗る車が走っている。

ミラーボールを抱え、疲れきったアナベルが沿道を一步一步、歩いている。

それを素通りするヨシオの車。